大正期の服装改善運動における考案服の特質

—尾崎芳太郎著『是からの裁縫』における「経済服」の再現（三）—

夫馬佳代子・遠藤　綾子

一、はじめに

本研究は、大正期の生活改善運動の一環として、近代国家に相応しい新たな衣服の必要性を唱えた服装改善運動における考案服の再現を通して、当時の和服から簡易洋服への転換過程の特質を明らかにすることを目的としたものである。[1)～10)]

この時期の服装改善運動は半官・半民で取り組まれ、日本服装改善同盟会が服装改善の推進母体としての役割を果たしていた。この団体における新たな衣服の考案及び縫製の中心的な指導者が尾崎芳太郎である。

そこで、本研究では、服装改善運動における考案服の特徴を探る対象として、尾崎芳太郎が執筆した『経済改善　是からの裁縫』前篇・後篇に記載される考案服を、掲載内容の製作手順に忠実に基づき再現を試み、和服から洋服への転換期に如何なる発想で新たな時代に適応する近代衣服を生み出そうとしたかを、実証的に検証することを試みた。

なお、服装改善運動の背景及び推進者の尾崎芳太郎については、第一報に記した為、本報では省かせていただく。第一報[10)]では、考案服再現の対象資料とした『是からの裁縫』における衣服考案の趣旨や布の節約を目的とした「経済服」の特色及び再現した経済服「一反で八尺あまる本裁」の製作をもとに和服から転換する過程の一部を報告した。第二報[10)]では、同様の手法を用いて経済服「三分の二でできる四ツ身と三ツ身」の再現を通して、和服から新たな衣服を提唱する過程を明らかにした。

本報では、「経済服裁ち合せ各種（一反で筒袖本裁長物一枚と子供ガウン一枚）」の再現過程を通して、従来の日常着であった和服からの転換及び経済的背景からの物資不足、また能率推進運動などの影響を土台とした合理的な生活観の普及が、衣服製作にもいかなる影響を与えたかについて検討した。考案服の再現により、上記の内容について若干の知見を得たので報告する。

二、「経済服」から「改良洋服」へ

尾崎が考案した「経済服」についての考え方は、第一報で触れたが、ここでも再度引用する形で述べておきたい。尾崎の考える「経済服」は、「改良服」と表現される「改良和服」、さらに「改良洋服」を経て、簡易洋服を導入するための経過的な衣服と捉えることができる。平面構成である和服から徐々に新たな衣服形態に移行するための独自な発想の衣服として捉えることができる。その考え方や発想は以下の文章に示されている。

改良洋服へ

従来の普通洋服は已に改善の主なる要素は具備へて居ますけれども、由其洋服は欧米人に適するのでありますから、其のまゝを採用しては、我が國の風土、骨格、人情などに適しません。之を適するやうに考へたのが、改良洋服です。して改良洋服は今申し上げましたやうに、普通洋服が基點になつて居ますから、普通洋服の心得があれば苦もなく直ぐに仕立られま

す。今の處私は改良洋服が日本服装改善の到達點であると信じます。サ！以下左の順序で講述いたしませう。

普通服から経済服……・・・

……経済服から改良服……・・・

……改良服から洋服……（是からの裁縫　前編　五頁引用）

尾崎は「経済服」の十大特色を以下のように述べている。

「経済服」は①普通服に比べると、約五分の一の布が節約、②仕立て直しも可能、③普通服よりも縫い目が少ない。これにより仕立て時間が通常の三分の一、④余った残り布で子供服ができる、⑤外観は普通服である、⑥裁ち方が簡単、⑦並幅物は九寸五分あれば十分できる、⑧地伸ばし法の効果、⑨前身の帯がくれの所に縫い目がある、⑩見栄えが良い、などを特徴としてあげている。

「尾崎服」と名付けられた「経済服」の一種である単長着は、身頃と衽を続けて裁つ為、布地が経済的であり、縫製時間が短縮できる利点がある。しかし、一方で、外観は和服と同様としながらも、和服と比較すると袖の振りも無く、対丈で従来の和服とは著しく異なる形態である。（第一報掲載）

この中で特に④余った残り布で子供服ができる点が、本報告で再現した経済服の特徴である。尾崎は残布で子ども服を作ることに関し、次のように記している。

残りの布は小供服に

普通服（普通仕立）に要るだけの布で経済服を拵へますと、本裁では並幅の七八尺位は餘ります。中には、『折角一反の反物を買って餘しても』とおっしゃる方もありませうが、少々工夫していただきますと、お格好な子供服が一着出来ます。子供服の合ふ合はぬといふ御心配はいりません。子供洋服を御参照下さい）子供洋服は飾りを考へて拵へますれば、祖父さまの残布で、まことに可愛らしいお孫さまのお召物も出来あがりますから、柄物の残布を洋装に利用されましても、随分格好いたしますが、改良服の和装に仕立ますればあまり考へなくとも、それゝ調和しいものが出来上ります。）子供物の御入用でないお方には「胴抜下着」や「裾廻」などに致しますれば随分贅沢な御召物も出来上ります。（『是からの裁縫』引用）

本報で再現する「経済服裁ち合せ各種（一反で筒袖本裁長物一枚と子供ガウン一枚）」は、こうした考え方から考案された経済服である。

一方で、尾崎は「改良和服」の視点でも衣服の考案に取り組んでいる。尾崎が提唱する「改良和服」の特徴として、①長着と袴が普通服の半額の一反でできる、②上張り式なので夏冬の区別なく着れる、③外観は従来の袴着用姿と変わることがない、④男女児の服装は同じ作り方などを挙げている。尾崎は考案服「普通用布の三分の二で出来る四つ身」においても、幅広布の活用、袖と身頃を続けて縫う、背縫いがない等、従来の和服の常識や定型を根底から崩す柔軟な発想で、「改良洋服」に繋げるための「改良和服」を創り出したのである。（第一報掲載）

例えば「一疋で本裁が三枚出来る重ね物」は、「経済服」から「改良和服」の発想に移行する過程で考案された衣服と捉えることができる。

このように「経済服」は「改良和服」「改良洋服」を考案するための発現の原点と位置づけられる。

三　経済服裁ち合せ各種（一反で筒袖本裁長物一枚と子供ガウン一枚）

尾崎芳太郎著『是からの裁縫　前編』の「経済服裁合せの各種　一反（二丈八尺）で筒袖本裁長物一枚と子供ガウン一枚」については、次のように記載されている。

一反とは並幅で二丈八尺のことであるが、これで本裁と子供服が作れるということである。本文中には、資料1に示す裁ち図があるのみで、

特に文章での説明等はない。裁ち図によって経済服の特色である、「残りの布は子供服に」の具体的な例が示されているのである。そのため、筒袖本裁長物は、裁ち図が並幅であるので、並幅物や本裁箆付標準寸法を参考に作成した。子供ガウンは記載されていないので、裁ち図から考えて製作した。

筒袖本裁長物と子供ガウンの裁ち方・箆付について述べる。

（一）裁ち方・箆付

①裁ち方

資料１の裁ち図に従い、図１・図２に示す型紙を作成する。写真１は筒袖本裁長物の裁断した身頃用の布、写真２は左が衿布、右が袖布である。写真３は子供ガウンの裁断した布である。子供ガウンの首穴だと思われる円形は、直径十八cmの円でくりぬく。これは頭周りが約五十六cmになるようにするためである。また、袖下になるところの切り込みは、九寸五分の四分の三の約七寸一分の長さを切り込む。

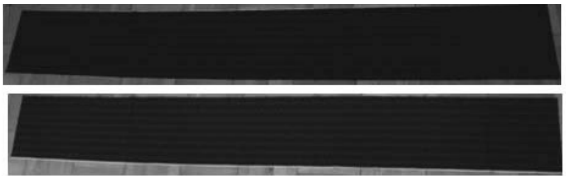


写真１　普通身幅裁　前布の裁目に巻縫

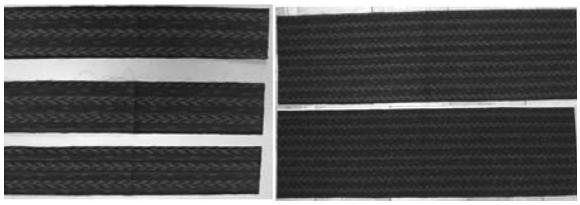
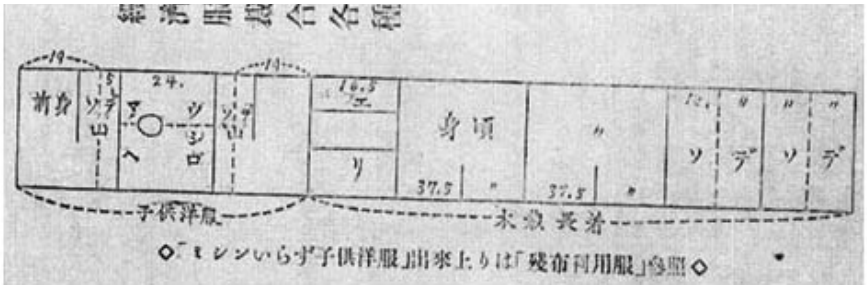


写真２　筒袖本裁長物　布の裁断　左が衿、右が袖

写真３　子供ガウンの布の裁断



資料１　経済服裁合せ　筒袖本裁長物の裁ち図

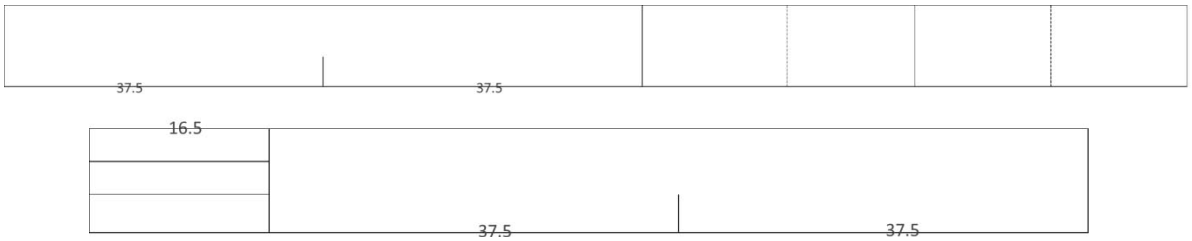


図１　筒袖本裁長物の型紙

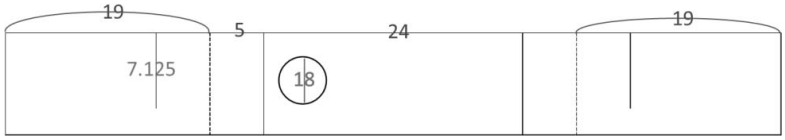


図２　子供ガウンの型紙

②箆付

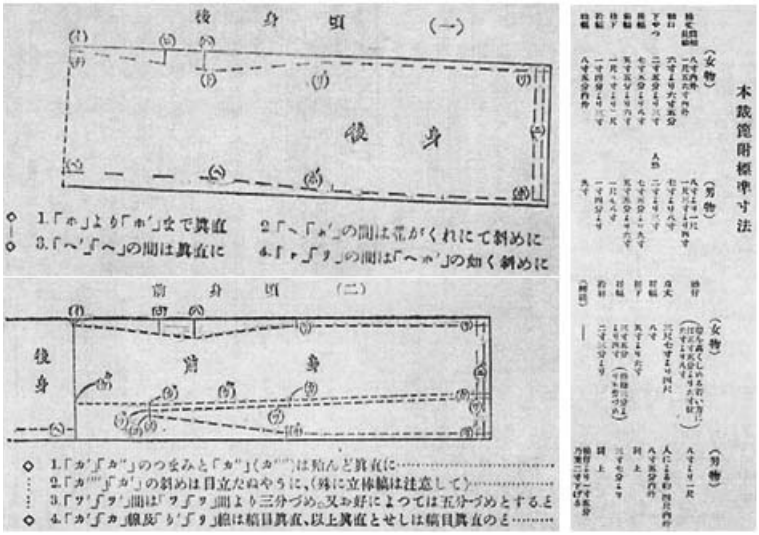
筒袖本裁長物は、並幅物の箆付と本裁箆付標準寸に従い箆付をする。（資料2参照）子供ガウンは、端から一cmで箆をつける。

（二）縫製手順

筒袖本裁長着と子供ガウンに分け、縫製手順・方法を示す。（資料3参照）

筒袖本裁長物

筒袖本裁長物の、縫製手順は、袖、背、裾下、衿付、脇縫いと裾絎け、袖付と身八つ、という順に製作する。



資料２　筒袖本裁長物の箆付と本裁箆付標準寸法

袖

①袖下を袋縫いする。（写真4）

②袖口下を合わせ縫いする。（写真5）

③袖口を三ツ折絎する。（写真6）

④袖振りの耳絎けをする。（写真7）

背縫い

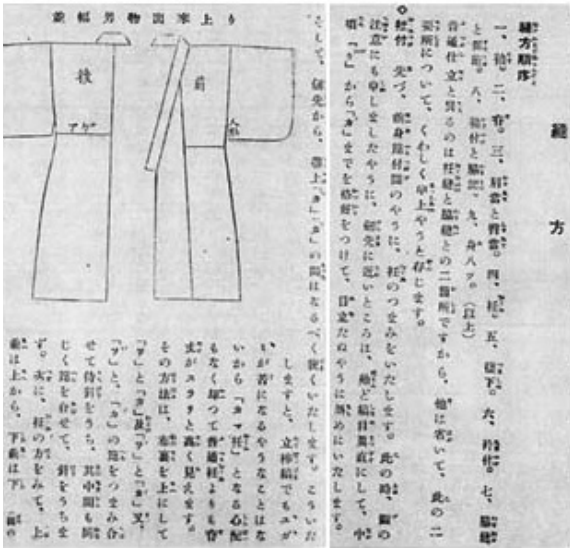
箆に沿って縫う。中表にし、箆が途中でくびれているので注意して縫う。（写真8）

裾下

裾下を絎ける。（写真9）

衿付

衿付をする。箆に注意して縫う。（写真10）



資料３　筒袖本裁長物の縫製手順

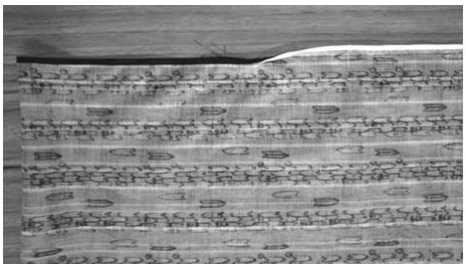


写真６　袖口を三ツ折紆する

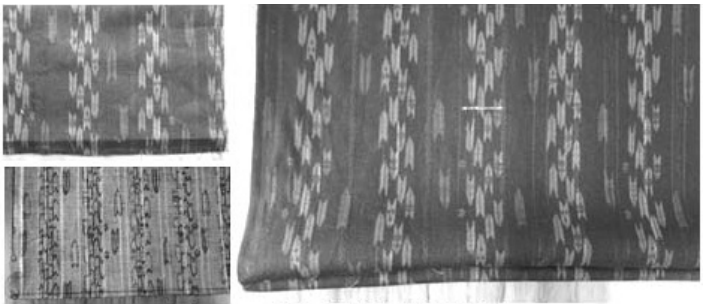


写真４　袖下を袋縫い

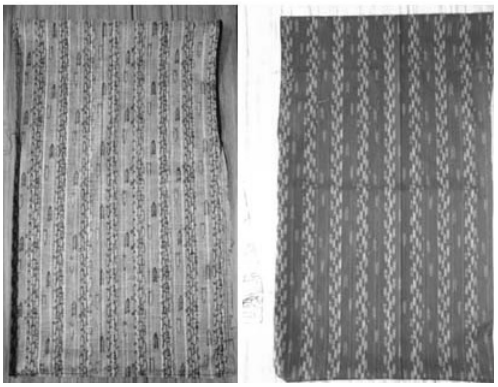


写真７　袖振りの耳紆けをする

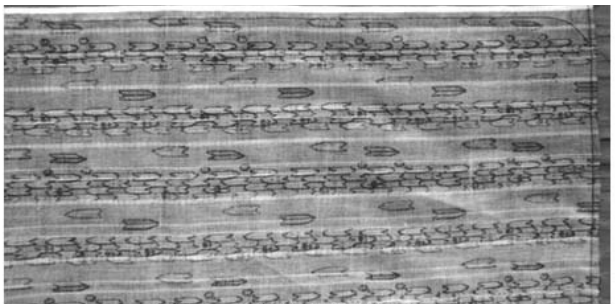


写真５　袖口下を合わせ縫いする

写真10　衿付けをする

写真８　背縫い

写真11　脇縫いと裾紆け

写真９　裾下を紆ける

写真12　袖付・身八ツを縫う

写真13　完成した筒袖本裁長物

脇縫いと裾紆け

脇は中表にし、標を合せて縫い、折は前身に返す。脇も背と同様、くびれているので箆に沿って縫っていく。次に裾紆けをする。三ツ折紆けにする。（写真11）

袖付と身八ツ

袖付をし、身八ツを縫う。袖は中表にして縫う。（写真12）

写真13は、完成した筒袖本裁長物である。

子供ガウン

以下、子供ガウンの縫製手順は、脇縫い、前閉じ、袖・胸、袖口・裾紆け、首回り、の順で製作する。

脇縫い

脇縫いをする。裁ち図より、布は三枚に別れるが、首穴があるものを真ん中にし、三枚を並べる。その際、各布の長い辺が隣同士になるようにする。その長い部分が脇になるので、中表にして真直ぐに縫う。（写真14）

前閉じ

前身を閉じる。両脇の下側を前に持っていき、中表にして縫い合わせる。（写真15）

袖・胸

袖下と前のあきを縫う。縫い代がほとんどないので、ぎりぎりを直線に縫っていく。ほつれないように注意する。（写真16）

袖口・裾紆け

袖口と裾を紆ける。両方とも三ツ折紆けをする。（写真17）

首

首周りをまつり紆けする。適度に切込を入れながら、つらないように注意して紆ける。（写真18）

写真19は、完成した子供ガウンである。

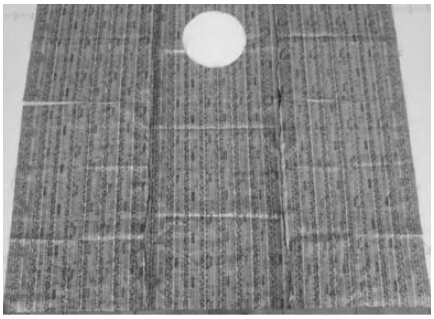


写真14　脇縫い　中央に首通しの穴をあける

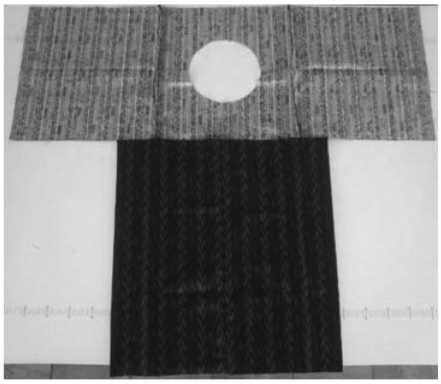


写真15　子供ガウンの前身頃を閉じる

写真18　首周りをまつり紐けする

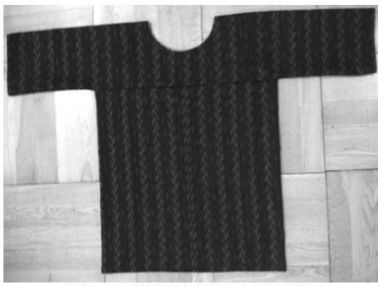


写真17　袖口と裾を三つ折り紐けにする

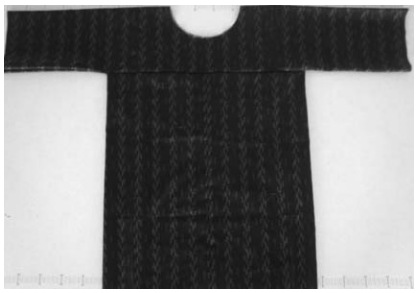


写真16　袖下と前のあきを縫う

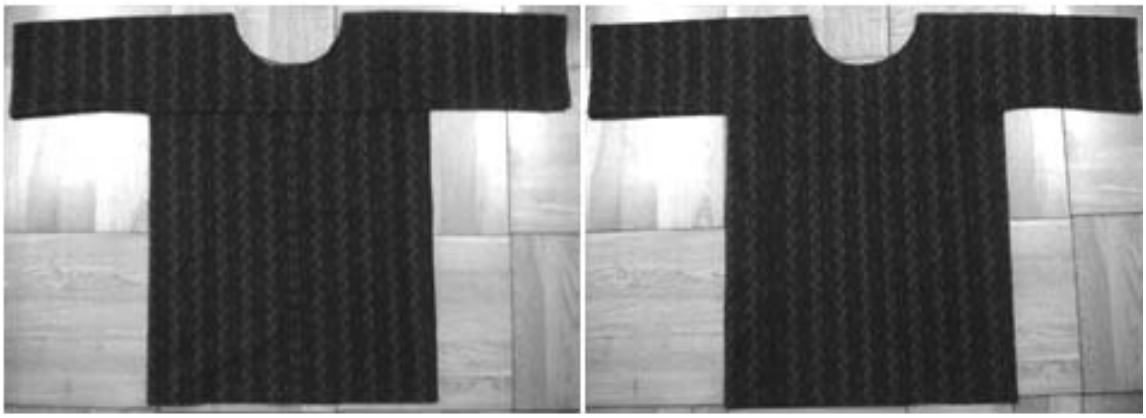


写真19　子供ガウンの完成　前：左　後：右

（三）形態面の特徴と用布及び着装

筒袖本裁長物と子供ガウンに分けて、特徴と用布について述べる。

①筒袖本裁長物

特徴

箆付が特徴的で、背や脇がくびれているような形になる。衽がない形なので裁つところが少なく、その分縫目も少ない。残り布で子供服がつくられるので、経済的である。ただ、目次には「筒袖」となっているが、実際には「長袖」の形態であった。

用布

使用した布は、裁ち図より、九寸五分（36㎝）×二丈三尺五分（872.5㎝）＝31410㎠である。女物単衣長着は、並幅で一反1140㎝内外（1070〜1250㎝）＝38874㎠必要）なので、これと比べると7464㎠少ない布でできる。これは0.8倍となり、約五分の四の用布で製作できる。

②子供ガウン

特徴

裁ち方は簡単で、縫い上がりに前身には横の縫目が、後身には背中心ではなくやや外側に二本の縫目があるのが特徴的である。

用布

使用した布は、裁ち図より、九尺五分（36㎝）×七尺二寸（272.8㎝）＝9820.8㎠である。一反から筒袖本裁長物で使用した31410㎠を除くと6771.6㎠である。子供ガウンで使用する布は9820.8㎠であるから、こちらの方が布は必要となるが、約一つ分で二着製作することができるので、経済的であるといえる。（注　数式は横書きで示すこととする）

着装

写真20は筒袖本裁長物の着装、写真21は子供ガウンの着装である

写真20　筒袖本裁長物の着装

写真21　子供ガウンの着装

おわりに

本研究では、前報の継続として、尾崎芳太郎の経済服裁ち合せ各種（一反で筒袖本裁長物一枚と子供ガウン一枚）の再現を行った。この考案服は、尾崎が和服である着物から改良洋服に移行する過程で、従来の和服の反物生地を節約すること及び縫製時間の短縮を狙いとした簡易な製作法を取り入れた考案服であることが製作過程から明らかになった。「筒袖本裁長物」の名称からも、尾崎の意図は袖の袂の省略が狙いと思われるが、当時の衣生活の中では、労働着以外で筒袖の着物が着用される可能性は低いと思われる。「筒袖」と称しながら外見は尾崎が「目なじみ」と表現する着慣れた着物に見えるが、袖幅が狭く袖丈も若干短い着物に類似した形態を提示している。一方で残り布の子供服には、尾崎が最終的な考案服として提案する「改良洋服」に近い形態である筒袖と短い身頃を提案している。

本報告では、尾崎の経済服を再現する過程で、経済服から改良和服、さらに改良洋服に移行する過程を明らかにした。今後は「改良洋服」の再現を通して、尾崎が平面構成から立体構成である洋服をどのように理解し導入しようと試みたかについても検討していきたい。

前報でも述べた内容と重複するが、『経済改善　是からの裁縫』に掲載された考案服の多くは、尾崎芳太郎の頭の中で描いた、和服から洋服への道のりを示したものであると思われる。この本書の解説に基づき、考案服の再現に取り組むと、より一層、尾崎が独自に提唱した、「経済服」から「改良洋服」、さらに「簡易洋服」への発展は、和裁士であったからこそ、生み出した発想であったと思われる。

本研究で実践した、『経済改善　是からの裁縫』に掲載される数々の考案服の再現に取り組むことは、当時の日本の衣文化の中心であった着物、つまり平面構成である和服文化から立体構成である洋服文化への発想の転換の過程を、その一端ではあるが、形として明らかにすることができたのではないかと考えている。

本報告は、科学研究費基盤研究C「大正期の服装改善運動が果たした役割について—考案服の復元による検証—」に関する研究の、縫製過程の再現の一部を報告させていただいたものである。

なお、『経済改善　是からの裁縫』に掲載される他の「経済服」「改良洋服」等の再現は、科学研究費報告書に全て収録する。本報告の再現の製作は遠藤綾子が担当した。

■参考文献

尾崎芳太郎『是からの裁縫　前編』日本服装改善會出版部、大正10年

■注

(1)夫馬佳代子「明治期の衣服改良運動について」、日本風俗史学会会誌『風俗』第24巻第2号、一九八五年、二七～三八頁。

(2)夫馬佳代子・松田純子「大正期の服装改善運動と裁縫教育内容の変遷―(1)婦人向け雑誌掲載の考案服誌上講習について―」、日本生活文化史学会会誌『生活文化史』第31号、一九九七年、五九～六九頁。

(3)夫馬佳代子・松田純子「大正期の服装改善運動と裁縫教育内容の変遷―(2)『経済改善　是からの裁縫』における考案服「鋏いらず」について―」、日本生活文化史学会会誌『生活文化史』第31号、一九九七年、七〇～七九頁。

(4)松田純子・夫馬佳代子「大正期の服装改善運動と裁縫教育内容の変遷―(3)裁縫教科書における洋裁の導入―」、日本生活文化史学会会誌『生活文化史』第31号、一九九七年、七九～八九頁。

(5)夫馬佳代子・加藤裕美子「服装改善運動における被服教育―『経済改善　是からの裁縫』に見られる製作の発想とその教授法―」『岐阜大学教育学部研究報告―自然科学―』第25巻第2号　二〇〇一年、七七～八八頁。

(6)夫馬佳代子「衣服改良における和服から洋服への変容」、日本風俗史学会編『日本の風と俗』つくばね舎、二〇〇〇年、三二五～三四四頁。

(7)夫馬佳代子「『婦女新聞』誌上講習における被服製作指導の背景―改良運動への取り組みと変遷に関する資料―」『岐阜大学教育学部研究報告―人文科学―』第49巻第2号、二〇〇一年、七五～八四頁。

(8)夫馬佳代子・新倉陽子「『婦女新聞』誌上講習における被服製作の指導法―考案服の型紙と技術面の特徴―」『岐阜大学教育学部研究報告―人文科学―』第49巻第2号、八五～九三頁

(9)夫馬佳代子・髙橋知子「昭和初期の服装改善運動の特徴とその背景について（一）―戦時下の新聞の『家庭』欄に記された衣生活―」、衣の民族館・日本風俗史学会中部支部『研究紀要』第7号、衣の民族館、一九九七年、三一～四一頁。

(10)夫馬佳代子・髙橋知子「昭和初期考案の農村婦人作業服の復元とその形態的特質―地域に伝承される労働着との比較を通して―」、衣の民族館・日本風俗史学会中部支部『研究紀要』第4号、衣の民族館、一九九四年、三三～四八頁。

(11)夫馬佳代子・遠藤綾子「大正期の服装改善運動における考案服の特質―尾崎芳太郎著『是からの裁縫』における「経済服」の再現（一）―」『岐阜大学教育学部研究報告―人文科学―』第64巻第1号、二〇一五年、一八〇～一九二頁。

(12)夫馬佳代子・遠藤綾子「大正期の服装改善運動における考案服の特質―尾崎芳太郎著『是からの裁縫』における「経済服」の再現（二）―」『岐阜大学教育学部研究報告―人文科学―』第64巻第2号、二〇一六年、一一〇～一二〇頁。